

吉屋信子「蝶」に描かれた上海

城戸美風

一、はじめに

日中戦争の開始を受けて、吉屋信子は一九三七年八月から十月にかけて『主婦之友』特派員として戦地取材のため中国へと赴いている。「蝶」は、途中信子の戦地遠征を挟みながら、文芸雑誌『新女苑』（実業之日本社）に一九三七年一月から十二月にかけて連載された長編小説である。その後、本作は『吉屋信子選集 第四巻 お嬢さん・蝶』（新潮社、一九三九年）に所収された。

長きにわたる作家業の中で数多の作品を発表した信子だが、未だに研究の手が及んでいないものは多く、「蝶」はまさに吉屋信子研究における盲点とも言える作品である。『戦禍の北支上海を行く』（新潮社、一九三七年）をはじめとして、戦時下における信子の文筆活動に対する研究には厚みがあるが、その中でこの「蝶」という作品は見逃されてきた。

「蝶」は、アヘン中毒の妖艶な美女・三津木真珠未亡人に恋をした主人公の藤川鮎子が、次第に「蝶」「黒衣夫人の姿」「蘭の花」の幻影に翻弄されていく怪奇幻想小説である。「蝶」の連載付近には「女の友情」（『婦人倶楽部』一九三三年一月～一九三四年十二月）や「良人の貞操」（『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』一九三六年十月六日～

一九三七年四月十五日）など数々の人気作を打ち出し、まさに油ののった時期にあった信子だが、読者からの反応を見るに「蝶」の評価はそう高くない。その一因として、藤田篤子（二〇一三）は本作の「恐怖小説／心理ホラー」に則った文体を挙げているが、本稿では、作中における印象的な場面の舞台に採択された上海という要素に着目したい。

一九三七年に、信子は自作の中で上海を複数描いている。映画化に舞台化にと、当時絶大な人気を博した「良人の貞操」には楽しい観光地としての上海が描かれるが、戦地取材を経て発表された「相寄る影」（『日の出』一九三七年八月〜一九三八年六月^三）には上海に在留する日本軍や、現地の人々が持つ抗日思想が描かれ、戦争色がかなり強い。「蝶」に描かれた上海は、日本人にとって親しみ深い観光地としての上海と、戦場としての上海、そのはざまであると言えるだろう。

本稿は、「蝶」に描かれた上海と、作品発表当時における現実の上海、その様相を確認するとともに、主人公が予期せず己のファム・ファタルに遭遇してしまう作中屈指の恐怖の場面において、上海というトポスがどのような効力を発揮しているのか、分析を試みるものである。

なお、本稿ではテキストとして早稲田大学図書館編『新女苑』マイクロフィッシュ版（雄松堂フィルム出版、二〇〇七年）を使用した。

本論に入る前に、まず『新女苑』という雑誌の性質と、「蝶」に対する読者の反応を確認しよう。

『新女苑』は『少女の友』の姉的位置の雑誌となることを期待され、実業之日本社より一九三七年一月に創刊された。初代主筆である内山基は、『新女苑』の目的について次のように述べている。

現在の女性雑誌は最大顧客である家庭婦人のための雑誌としては極度に発達してゐるのであらうけれど、それは単に実用的現実的な点にのみ止つて自己を創造せんとする若き婦人の精神的要求をみたす為の具ではない。／＼最も知識を求めることに切なる若き婦人の教養的な要求を、今の女性雑誌は実用的方面程に重要と考へてゐるだらうか。最も多く本を読む階級である若き婦人に與へるのに、かうした表面的記事と、刺激的記事の充滿を以てして、それだけでよいのであらうか。／＼また二十にみたないうら若き乙女が夫を如何に巧に操縦するか、と云ふ記事を読んでゐる姿は美しいものではない。二十を過ぎて間のない若き女性が、千円を貯蓄するにはかくすべしといふ記事を読まされてゐる姿は、寂しい限りである。(中略)新女苑に家庭生活の巧みな処理方法をお求めになる方があれば、きつとその方は失望されるであらう。／＼又新女苑にギラギラと脂ぎる、社会的興味をお求めになる方があつたとしたら、恐らく失望されるであらう。／＼新女苑の希う所は、若き女性の静かにして内に燃える教養の伴侶である。^四

『新女苑』創刊号の目次を見ると、吉屋信子、芹沢光治良、丹羽文雄、木々高太郎による四篇の長編小説、片岡鉄兵、浅原六朗、井伏鱒二、矢田津世子、北川千代、中里恒子、円地文子、北村壽夫による八篇の短編小説に加え、詩や随筆、近代文学や音楽、映画作家、宝塚についての記事、加えて、レコードの新譜や最新映画のレビューなど、たしかに若い女性の知識欲を存分に刺激する内容となっており、料理や化粧といった「家庭生活の巧みな処理方法」に関する「実用的現実的」な記事は巻末に僅かに載せられている程度だ。

『新女苑』創刊直前に『朝日新聞』に掲載された広告には、次のような宣伝がなされている。

創刊号には、吉屋信子、片岡鉄兵、吉田絃二郎、西条八十、其他現文壇の巨匠新進の小説、隨筆、數拾篇！一流大家担任執筆の教養講座など、素晴らしい充実ぶりです。^五

創刊号から登場する作家として、いの一に吉屋信子の名が掲げられており、支持母体に若い女性読者を多く有する信子が雑誌を代表する看板作家となるよう期待されていたことが伺える。

ここで、『新女苑』巻末にある読者投稿欄「ペンルーム」に掲載された、「蝶」に対する読者の反応を列挙しよう。

●「蝶」に対する読者の感想

・第三話への感想（「ペンルーム」『新女苑』一九三七年五月）

▲私は何を於ても吉屋さんの「蝶」をよまないではいられません。でも三月号ではとても短いので、あつけない様にも感じましたが・・、先生御病気なのじやありませんかしら。（大阪・みよし）

・第四話への感想（「ペンルーム」『新女苑』一九三七年六月）

▲今月号の小説「蝶」はますますお面白くなるのね。（富山・松住静恵）

・第五話への感想（「ペンルーム」『新女苑』一九三七年七月）

▲吉屋先生の「蝶」ほんたうに阿片の様な魅力とでも申しませうか。（東京・小笹千鶴）

▲『蝶』ようございますね、吉屋先生によるしくお伝へ下さいませ。（神戸・黛美栄）

▲吉屋先生の「蝶」も興味深く。（東京・内山淳子）

・第六話への感想（「ペンルーム」『新女苑』一九三七年八月）

- ▲吉屋先生の「蝶」増々面白くなつて来ましたのネ、今の長編の中ちやこれが大好き！（青島…小夜時雨）
- ・第七話への感想（「ペンルーム」『新女苑』一九三七年九月）
- ▲吉屋先生の「蝶」心ひかれる小説、待遠しくて。（北海道…小牧羊子）
- ・第八話への感想「ペンルーム」『新女苑』一九三七年十月）
- ▲吉屋先生「蝶」何だかをかしく思ふ所があるけれど、やはり妖しい魅力にひつぱられて一心に読みます。（福岡…淡海千嘉子）
- ・第九話への感想（「ペンルーム」『新女苑』一九三七年十一月）
- ▲妖しき真珠夫人の魅惑、黒い蝶！オルキース！何んて恐ろしき魔女でせう。（名古屋…恒美）
- ▲「蝶」が面白いですね。（大阪…江口十四子）
- ・第十話への感想（「ペンルーム」『新女苑』一九三七年十二月）
- ▲「蝶」の気持は少し分りませんわ。（東京…真紀みづほ）
- ▲小説「蝶」はあんまり好みませんの何だかあり得ない事なんですもの。（静岡…ナナコ）
- ・第十一話への感想（「ペンルーム」『新女苑』一九三八年一月）
- ▲「蝶」すこし短くてあつかなかつたけれど、吉屋先生が北支にいらした為とか、来月号を楽しみにしてをります。（東京…江藤康子）
- ・第十二話への感想（「ペンルーム」『新女苑』一九三八年二月）
- ▲蝶は私には分らない所もありましたが終の所好きです。（盛岡…谷村汀子）

感想を俯瞰してみると、最初は好評であった読者の反応が、第八話に対する「何だかをかしく思ふ」という投稿を境に下降していく様が見てとれる。

「蝶」第八話は、物語の舞台が日本から上海へと移った回である。次節では、作品内と現実、二つの上海の様相を照らし合わせることで、読者が作品に対して抱いた違和感について分析を試みたい。

二、作品内／現実の上海、そのギャップへの戸惑い

信子は「良人の貞操」連載の傍ら、一九三六年十二月末に横浜港から神戸港、上海、香港を経由してマニラへと至る取材旅行に出立した。その目的について、信子は「何故、急に思ひ立つて、マニラへ、急がしい中を出かけて行つたかといふと、その頃、一生懸命で書いてゐた大阪毎日、東京日々新聞小説（良人の貞操）の女主人公がマニラへ行くので、どうしても、実地探検に行つて、感じを捕へて来たかつたからである。」^六と語る。たった二日のマニラ滞在で刑務所へ墓地へと熱心に取材に赴いた信子だったが、結局「良人の貞操」の最終場面にマニラは描かれず、むしろ、主人公の加代と娘の静江、新しい良人である準吉の三人を乗せた船が目的地のマニラへと至る途中、停泊した上海の様子が描かれている。

取材旅行を踏まえた上で「良人の貞操」に描かれた上海は、次のようなものである。

「莫迦だなあ、上海なら日本人街で寿司も喰えるぜ」^七

「はい、これおじちゃんからおみやげ！」／と差し出されたのは、上海の南京路の花店で準吉が買った温室菓子の籠だった。それに永安公司以静江が買って貰った支那の花嫁花婿人形の一对——「静ちゃん面白かったの？」

／母がたずねると、／「とつてもおもしろかったわ、支那の人がいっぱい、お家の柱が赤いのよ、そこで支那料理食べたの、それからおじちゃんと人力車に乗ったの、支那人の車屋さんよ」^八

信子は取材旅行について「上海も香港も、私には未知の港であつただけに、見るもの聞くもの面白かつた。」^九と振り返っているが、「良人の貞操」に描かれた上海はまさに、日本人にとって親しみ深く、子どもにとつても楽しい観光地だ。

上海の発展は、租界の発展とともにあつた。アヘン戦争後の南京条約締結によつて、上海は開港される。一八四五年に第一次土地章程が告示され、まずはイギリス租界が誕生し、続いて、アメリカ租界、フランス租界の順に設置される。また、一八六三年には英米両租界が合併し、共同租界となる。一九世紀の後半、西洋人らの手によつて租界都市として栄えた上海にはダンスホールや酒場、劇場など様々な国の娯楽が集い、歓楽の巷と呼ばれていた。

日清戦争に勝利した日本は、日清通商航海条約締結により本格的に上海進出を開始し、共同租界の一部である虹口地域に日本人街を築く。日露戦争を経て紡績業を中心に日本資本が広がっていく中で上海における日本人の人口は増え続け、一九三七年時点では、上海に居留する外国人最大のコミュニティを形成していた。^{一〇}

『戦禍の北支上海を行く』、『花物語』連作より「水仙」(『少女画報』一九一六年十二月)、「良人の貞操」、「女の教室」(『東京日日新聞』「大阪毎日新聞」一九三九年一月一日～八月二日)、「蕩」(『女流作家十佳選』興亜日本社、一九四〇年所収)に描かれた「上海・支那イメージ」について考察を行った徐青(二〇〇九)が指摘するように、信子は「大衆が共有している」上海イメージを「端的に反映」することを意識していたのだろう。^{一一}

では、「良人の貞操」より少し後に書かれた「蝶」における上海は、一体どのような様相を呈しているのだろうか。

ある日、鮎子は真珠がアヘン中毒であることを知って（恐ろしい魔女の夫人……阿片愛用者——そして……私はあの人に亞片^{マド}のやうに愛されやうとしてゐる……いけない、いけない！間違つてゐる、人間の日陰の道だ……（中略）あゝ、どうして、あの夫人の魅力と誘惑から逃れやう……）^{二三}と恐怖する。その後すぐ鮎子は真珠への恋情を断ち切るために恒雄という青年と結婚するが、さらに真珠との接触を避けるため、海外での結婚生活を夫に切望する。妻の強い希望に対して、恒雄は「海外で新家庭生活を始めやうての、なるほど近代的なお嬢さんの感覚だなあ——僕も賛成するよ——しかし、今すぐでは、とてもロンドンだのニューヨークの支店へはやつて貰へないが上海ぐらいなら、あすこの支店話になら廻して貰へるだろう」^{二三}と職場に転勤希望を提出し、すぐに受理される。

一九二三年には長崎—上海間を結ぶ定期航路が開設され、その翌年からは神戸—長崎—上海線が強化される。連絡船を利用してバスポートなしで気軽に行くことのできる上海は、当時の日本人にとって内地の延長線とも言える場所であつたのだ^{一四}。「蝶」においてもまた、上海は欧米よりも気軽に行くことのできる近場の異国として描かれている。

長崎丸を利用して上海へと渡航した村松梢風は、彼の地について次のように語る。

そもそも私が上海へ行つた目的は、変つた世界を見ることであつた。変化と刺激に富む生活を欲したからのことであつた。私の其の目的には、上海は最も適当した土地であつた。それは見様に依つては実に不思議な都会であつた。其処は世界各国の人種が混然として雑居して、そしてあらゆる国々の人情や風俗や習慣が、何んの統一もなく現はれてゐた。それは巨大なるコスモポリタンクラブであつた。^{一五}

上海には、観光客だけでなく、新天地でひと旗上げようという目的で来訪する人々も多かった。鮎子もまた、新たな人生のために上海への移住を決めた一人だ。恒雄と結婚してからというもの、鮎子は繰り返し視界に映る幻影に悩まされていた。上海へと向かう途中、真珠の幻影に怯える一場面を挙げよう。

鮎子は出立前の急がしかつた準備の疲れが、今出て来たやうに、ぐったりして、それらの人々の姿を遠い夢でも覗くやうに見詰めて居た。(中略)そこへすと歩み寄つた人影があつた。黒い絹の夜の服に銀の飾りをつけた背高い女の姿だつた——黒の服——鮎子は全身の血が逆上した。もしや真珠夫人が人知れず同船して——彼女は長椅子をはつと跳び上らぬばかりに立つた——その黒の服の女は外人の老夫婦と一言二言話しかけると、こつちを振り向いた——金髪の眼の青い、唇を紅く描いた——外人の女だつた。真珠夫人と服こそ同じ、顔も感じも違つてゐた。／ほつと胸撫でおろした鮎子は、又長椅子に腰をおろした。此の怯えた幻影への弱い神経を情けながつた。蝶と黒い服——この幻影を逃げに日本を離れても、まだくその幻影は海に浮かぶ船のなかまで亡霊のやうに、彼女につき纏ふらしかつた。／(強くならなければ、あくまで強く!)／鮎子は眼をぢつとつぶつて、我れと言ひきかした。^{一六}

ふとした瞬間に脈絡なく出現する幻影に怯え通しの鮎子であつたが、上陸してすぐは異国の文化への戸惑いがあつたものの、上海での暮らしを積極的に楽しむべく努力している。その新婚生活は、次のようなものである。

鮎子も恒雄も、上海はもの珍らしかつた。暫は見物する毎夜だつた。恒雄は妻を伴つてハイアライに出かける。

網の杓子のやうな一種のラケットを手にくくりつけて、玉を高い壁にぶつけて受け合ふ勝負、選手は若いスベイン人、そしてその選手に賭ける——なんのことはない、選手は競馬の馬と騎手を兼てゐるやうなものだつた。日本には見られない一つの賭け事——恒雄も鮎子も珍らしがつて一夜をうつつだつた。それからダンス場——日本の窮屈なダンスホールとちがつて、ジャズにダンスに人間の踊る本能を満足させる限りの自由に開かれたその灯の家——それから日曜日は有名な競馬場——恒雄と鮎子は旅人の持つ限りの好奇心に日夜上海を歩き回つた。一七

鮎子と恒雄は上海特有の娯楽に明け暮れ、楽しい新婚生活を謳歌している。その様子は、いかにも幸福そうな若夫婦といつたところだ。

一方で、一九三七年七月七日には盧溝橋事件が勃発し、本格的に日中戦争が開始する。八月には第二次上海事変も起こり、あらゆるメディアで激しい戦闘によつて壊滅した上海の悲惨な様子がこぞつて報じられる。そこには、「蝶」に描かれた楽しい観光地の姿は見る影もない。当時上海には多くの作家が各出版社から特派員として送り出され、各種メディアに戦地についての記事が寄せられた。『東京日日新聞』からの派遣で八月に上海へと到着した木村毅は、その惨状について新聞社に「上海市内は廢都の如くわが方の爆弾が落下して黒煙の噴き上る様、さながら関東大震災の時の東京のやうだ。」^{一八}と電報を送っている。なお、八月には国民精神総動員実施要綱が閣議決定され、十月には国民精神総動員中央連盟が発足する。

物語内に描かれた上海と、連日メディアで報道される上海の惨状との間にはかなりのギャップがある。「蝶」第八話以降から登場する『新女苑』読者の「をかしく思ふ」「あり得ない」「分らない」といった作品への違和感は、

このギャップに対する戸惑いに起因するものではないだろうか。そして、それは信子の意図するところだったのではないだろうか。

戸惑いの感情は、不気味さへと直結する。「蝶」第八話に描かれた鮎子の恐怖は、日中戦争が本格的に開始する直前、上海という場に漂う緊張感を利用することで、より鮮烈なものとなっているのだ。

次節では、「蝶」に散りばめられた時局への意識が、鮎子の恐怖を描いた場面においてどのように作用しているのか、物語の舞台として採択された上海という場への考察と絡めながら、分析を行う。

三、時局への意識

これまで確認してきたように「蝶」に描かれた上海と、現実の上海との間にはかなりのギャップがある。しかし、直接的な描写こそないものの、「蝶」には時局への意識が随所に見られる。

盧溝橋事件は本格的に日中戦争が開始する契機となったが、それ以前から既に日中関係は悪化の一途を辿っており、度々局地的な武力衝突が発生していた。『大阪毎日新聞』の海外視察員として一九二一年に中国へと派遣された芥川龍之介は、同誌にルポルターージュを幾篇か寄稿し、後にそれらをまとめた上加筆して『支那遊記』（改造社、一九二五年）を発表しているが、そこには中国を観光する中、至る所で「排日の気焰」を目にしたことが記されている。

満州事変以降、中国での排日運動は一気に激化するが、中でも当時の中国最大の貿易港であった上海では特に激しい排日運動が起きていた。一九三二年には第一次上海事変が勃発し、その要因として上海現地における排日思想が日本国内で多く言及された^{一九}。また、盧溝橋事件の周辺にも中山水兵射殺事件（一九三五年十一月九日）や上

海日本人水兵狙撃事件（一九三六年九月二三日）などが起きている。

「蝶」には、こういった同時代における日中関係の緊張感が反映されている。たとえば、「蝶」第八話で鮎子が真珠に遭遇する場面は次のようなものである。

——いちにち良人の留守をアパートの暖炉の前に送るのは不健康なので、彼女は太陽を浴びに、近くの仏蘭西租界の公園に出かけるのが、その日頃のならばはしだった。／支那人を入れない公園、入場料を取るその公園は冬枯れの木の枝さへ青銅の燭台に似た美しさに整然として居た。彼女がその公園をひと巡りして、出かけた時、その前の道路を一台の自動車がすうと横切つた。その自動車の窓硝子に、びつたりと眼をつけた灰白い顔が、鮎子に一心に向けられてゐた——鮎子は脚が釘付けにされて、五体が痺れた。おお、その車の窓の瞳、そしてその顔！忘れめや黒衣夫人の瞳だ、そしてその顔だ！あ、又幻影が再び蘇へつた！（中略）今——上海のフランス租界の公園の入口近くを、彼女の前を偶然通り過ぎた自動車の窓から、彼女めがけて投げられた花も同じその花——うす紫の匂ふ一束の蘭の花——鮎子は手をのべて、ひろひ取らうとして——あまりのおそろしさに、どうしても指先にひろひ得なかつた。見る見るその蘭の花の葩の一つ一つが、うす紫の蝶となつて空に舞ひ散る心地したのである。彼女は、その花を見すてて、一散に自分の住居のアパートへ逃げ込んだ。二〇。

右は、恒雄との結婚によって一時は楽しい新婚生活を味わつた鮎子が、己のファム・ファタルである真珠との遭遇によって一気に絶望の淵へと転落する場面である。鮎子が真珠に遭遇するのは「支那人を入れない」「仏蘭西租界の公園」だ。

戦前において、上海の租界内にある公園は殆どが「支那人」の立ち入りを禁じていた。敢えて租界内の公園を物語の舞台として設定することで、鮎子の絶望を描いた印象的な場面から「支那人」の姿は排除されている。その背景には、当時の上海における排日運動への忌避があるのではないだろうか。なお、「蝶」より少し遅れて連載が始まった「相寄る影」には、排日運動への反発がより顕著に描かれている。^二

鮎子の見る真珠の幻影は、上海の地で遂に実像を持って現れた。しかし、この場面において物語の視点は一貫して鮎子に置かれていたため、信用できない語り手である彼女が「仏蘭西租界の公園」で目撃した白昼夢のような光景が、現実には本当に起きたことなのか、それとも幻影であったのか、判断することは難しい。

鮎子にとって真珠は恋焦がれてやまない魅力的な存在であると同時に、己の人生を崩壊させてしまう恐怖の存在でもある。先述の通り、盧溝橋事件を発端とした日中戦争開始以前から、日中間の武力衝突は至る所で勃発していた。ずっと恐れていた幻影がとうとう実像を持って顕現する恐怖の場面において、崩壊へと向かいつつある鮎子の人生と上海という都市は重なるのだ。

この場面は、上海という歓楽の巷と戦場のはざまの時期にある不安定なトポスを物語の舞台とすることで、当時の日中間に漂う緊張感を効果的に利用する形で、鮎子の恐怖がより不気味かつ鮮烈なものになっていると言えるだろう。

さらに、作中における真珠の足取りにも注目したい。

（あれは夢だ！）無理にもさう思ひたかつた。彼女は良人の飲むウキスキーをソーダ水に割つて口にふくんでみた——恐怖の神経から逃れようとして、そして気を粉らす為に、さつき扉の入口に落ちた上海日報を取り上

げた。だが、みるみる彼女の顔色から血の気が失せた。／上海日報には、ありありと黒々とした活字が——女流洋画家三津木真珠夫人が二月の予定で、ちよつと南洋まで写生旅行に、馬來半島、ボルネオ、スマトラまで巡つて、ついでに猛獸狩のスリルを味はつて原始的なジャングルを心ゆくまで展望して、スケッチブックに納める旅——今朝上海に寄港の船より上海見物、午後出立——と、その船に訪問してインタビューをした記者の報告が掲載されてゐた——上海日報はこの港に來たり寄つたりする日本の知名の人とのインタビューを大げさに報じる新聞だつた。／「ああ！」／鮎子は熱にうなされたやうに、うめいて長椅子に倒れた。あれはまさしく幻影ではなく、あのひとだつたのだ。そしてあの人は、この私をあゝの二つの黒い瞳で上海で見逃さなかつたのだ。^{三三}

「馬來半島、ボルネオ、スマトラ」といった「南洋」を巡る真珠の足取りは、明らかに南進政策を意識したものである。

一九一五年には、「広く南洋の事情を調査研究してその啓発に便し、以て彼我民族の福利増進に資し、進んで世界の文化に貢献すること」^{三三}を目的として南洋協会が設立される。南洋協会は、図書や雑誌の発行、講演会などを通して、未開の地としての「南洋」イメージを形成することに寄与した。たとえば、大正期から昭和前期における代表的な南進論者であり、南洋協会の中心的人物でもあつた井上雅二は「南洋人の血を受けて、是を醇化したる日本人が、未だに未開の間に徨うてゐる南洋人を、その儘にして置けるであらうか。彼等を指導し開発し、自他の幸福を増進するは、所謂王道を蛮夷にも布くので、而も日本よりすれば、神武以前の故郷に帰るといふ愉快なる意味を含んでゐると思ふ。」^{三四}と唱え、日本の南方起源説を挙げることで「南洋」への進出を正当化している。

また、一九三六年に平田内閣の五相会議によって閣議決定された「国策の基準」の中には、「国家経綸ノ基本ハ大義名分ニ即シテ内国礎ヲ強固ニシ外国運^運の發展ヲ遂ゲ帝国ガ名実共ニ東亞ノ安定勢力トナリテ東洋ノ平和ヲ確保シ世界人類ノ安寧福祉ニ貢献シテ茲ニ肇国ノ理想ヲ顕現スルニアリノ帝国内外ノ情勢ニ鑑ミ当ニ帝国トシテ確立スベキ根本国策ハ外交国防相俟ツテ東亞大陸ニ於ケル帝国ノ地歩ヲ確保スルト共ニ南方海洋ニ進出發展スルニ在リ」^{二五}とある。温暖な未開の地、という「南洋」への幻想は日本国内に広く浸透し、信子もまた、その幻想を共有する一人であった。^{二六}

第二次大戦中、南進政策は大東亜共栄圏の旗のもとますます推進される。信子自身、一九四〇年の暮には『主婦之友』の派遣により「いまの日本と関係ふかい蘭印をひろく女性への紹介の目的」^{二七}で、「南洋」へと赴いている。「馬來半島、ボルネオ、スマトラ」を巡って「原始的なジャングル」で「猛獣狩」に興じる真珠の足取りには、帝国日本が「南洋」へと向ける侵略の眼差しがそのまま反映されているのだ。^{二八}

以上のように、『新女苑』読者に言及されることこそなかったものの、「蝶」には時局への意識が作品内の恐怖を煽るための仕掛けとして随所に散りばめられている。

四、魔都上海

上海は、物語の舞台装置としてしばしば文学作品に用いられた。ここでは、上海を描いた同時代の他作品を取り上げること、「蝶」と外部との接続を試みたい。

信子は『新青年』（一九三一年二月）に「とうさまのアミ」という短編を発表して以降、数年にわたって同誌のインタビューを受けたり、座談会に参加したりと、その関わりは決して浅くない。信子の怪奇幻想小説群の特徴と

して、藤田（二〇一三）は「現実」と「恐怖」の境を無くすことによって「恐怖の世界」を顕現させる技法である。「寄り添う」語りの文体を挙げている^{三五}。藤田はこの文体という切り口を通して「蝶」と同時代の探偵小説との近似性を指摘し、「恐怖小説／心理ホラー」である本作を信子にとつての「新境地」として位置付けているが、本稿では、別の角度から「蝶」に見られる同時代の探偵小説との近似性を見出したい。それは、上海の魔都としての性質である。

まず、鮎子が上海へと上陸する場面を見てみよう。

港には灯がついた。上海——未知の港——そして鮎子が、蝶と黒衣の夫人の幻影を怖れて逃れて来た市街の生活が、その夜から初まるのだつた。／船に別れを告げて降りて、波止場の支那人の薄気味悪い人夫や、聲々に何やらわめく新聞の売りたち、小さい支那水仙の花を一本拾仙でひさぐ花売の汚ない女たちの間を、きみわるさうに、鮎子は良人の腕に縋つてよけながら——自動車でホテルまで——その通り道の支那街——下等な支那料理の油鍋から立ちのぼる臭気——飲食店の軒に釣された豚の肉片——その店の卓子を囲んで、ドロ／＼した油のやうな食物を猫背になつてすゝる支那人の労働者——その店の前にごろりと足を投げ出して、外国人のすて、行つた葉巻の吸殻を血眼でひろふ支那人のルンペン……／「此の辺歩く時は、ハンドバッグはしつかり持つて歩かないと、盗られるよ」／恒雄がおどかさ様に妻に注意した。／獵奇と犯罪の港街——よく亞米利加映画に取材される怪奇な港街の風景は、黄や赤や白や——支那と外国のごつちやのカクテルの国際市場、あらゆる人種を溶かし込む溶鉱炉のつぼの青い火に煮えたるやうな不可思議な戦慄が鮎子の官能をしびれさせて伝はつた。^{三六}

ここに描かれているのは、「獵奇と犯罪」が混沌と渦巻く「支那と外国のごつちやのカクテルの国際市場」である。租界都市である上海は、華やかな西洋文化が雑然と集結する歓楽の巷であると同時に、その裏側には賭博場やアヘン窟、酒場、売春が氾濫していた^{三二}。上海を「魔都」と形容した村松梢風は、彼の地の暗黒面について「其變には文明の光が燦然として輝いてゐると同時に、あらゆる秘密や罪悪が悪魔の巢のやうに渦巻いてゐた。(中略)天国であると同時に、其処は地獄の都であつた。」^{三三}と語る。

上海で詐欺や強盜、誘拐、売春といった犯罪が昼夜を問わず跋扈していた要因として、租界における警察組織の複雑な管轄の問題が挙げられる。租界内には様々な人種で構成された警察組織が多数存在しており、共同租界には工部局によって組織された警察が、フランス租界には独自の警察が、その他、各領事館も独自の警察を擁していた。一租界の警察権は他の租界には及ばず、たとえば、共同租界で事件を起こした犯罪者がフランス租界へと逃げ込めば、共同租界の警察は管轄の問題でそれ以上手が出せない、ということが往々にして起こっていたのだ。^{三四}

『魔都』の中で梢風は、当時の上海に蔓延する様々な犯罪について触れた上で「上海へ来ると、かうした探偵小説の発端になりさうな話がザラにある。物騒と云へば是れ程物騒な土地は世界にあるまい。」^{三五}と述べている。実際、上海は探偵小説の舞台としてしばしば採用され、上海に取材した実話風のレポートも多く書かれた。外地を舞台とした探偵小説に詳しい藤田知浩は、「上海ならば街に転がっている事件をそのまま文章にしても、そこその記事になってしまう」^{三六}ことを指摘している。たとえば、「Shanghai」という英単語には、上海へと向かう船の水夫を調達するため、港で都合のいい人間を酒や暴力を用いて誘拐する、詐欺を働く、という意味があるが^{三七}、水夫の誘拐を描いた谷譲次の「上海された男」(『新青年』一九二五年四月)はこの言葉に由来している。犯罪を物語の主な題材とする探偵小説において、犯罪都市としてのイメージの強い上海は、優秀な舞台装置として機能するのだ。

「蝶」においてもまた、上海の魔都としての性質が遺憾なく發揮されている。その最たる要素が、鮎子が恋しい真珠のことを恐怖するきっかけとなり、最終的には二人の死因ともなったアヘンだ。

二〇世紀に入るとアヘンをはじめとする麻薬の類に対する危機感がいよいよ高まり、一九〇九年にはアメリカ、イギリス、フランス、中国（清国）、日本など計十三カ国が上海に集結し、国際阿片会議が開催される。これに参加した薬学者の田原良純は、会議では清国でのアヘンの培養及び輸入の停止、モルヒネの製造販売及び配布の制限、煙館の閉鎖、その他、会議参加各国それぞれのアヘン取締法の見直し要請などが話し合われたという^{三七}。上海での会議を経て、一九一一年から翌年にかけてはオランダのハーグで国際阿片会議が開催され、ここに万国阿片条約が調印される。それ以降も麻薬の取締は世界的に推進されていくが、表向きには麻薬禁止を掲げるものの依然として上海は麻薬の温床であり続けた。^{三八}

日本でも麻薬は強く危険視され、一九三〇年には「麻薬取締規則」が制定される。この法律はコカイン、モルヒネ類、大麻などを麻薬と定義し、その不正使用を防ぐため取り扱いを全て免許制として、製造や輸出に関しても厳しく制限を定めるものであった。また、一九三四年の「麻薬ノ中毒防止ニ関スル件」には「麻薬ノ慢性中毒患者ニシテ其ノ度甚シキモノハ成可之ヲ精神病院ニテ治療スルヤウ取計フコト」^{三九}とある。

ある日、葉を切らした真珠はアトリエに「亞片密輸入者」の男を呼びつける。その容貌は「世にも醜く、しかも片目は閉ぢられて、まるで支那の極刑の茹でられた首のやうであつた。そして、せむしのやうに背中丸く、背丈は子供のやうに低く、鮎子の肩にも及ばないやうだつた。」^{四〇}という風に、随分おどろおどろしく描かれ、作品内に不気味な雰囲気を放っている。「亞片密輸入者」は、「泥色の支那海を出て来た船の甲板から、深夜、投げ込まれる箱を、ジャンクに乗つて、命懸けで手に入れて来る薬」^{四一}を真珠の元へと運ぶのだ。小さいニッケルの瓶を受け

取ると、真珠は徐に己の腕に注射を打つ。それを目の当たりにして驚愕する鮎子に、真珠は恍惚としながら「何が怖いのか、これ綺麗な白芥子の花からつくる、モルヒネよ——上海の亞片よ……」^{四三}と告げるのであった。

「妖しき魔女」「人間の日陰の道」「おそろしい人」などと形容される真珠は鮎子の恐怖の対象として作品内にその妖気を漂わせているが、彼女を魔性の女たらしめているのは「上海の亞片」なのである。アヘンに享樂する真珠は、魔都上海を体現するキャラクターとして読むことができよう。

さらに、鮎子と恒雄の上海での新居がフランス租界のアパートであったことも見逃せない。杜月笙率いる秘密結社・青幫の主な活動拠点であったフランス租界は、上海で麻薬の類が厳しく禁止されて以降もその密売や不正使用が横行していた^{四三}。「殺人請負業社——魔都上海の戦慄——」（『新青年』一九三六年五月）や「九人目の殺人」（『探偵春秋』一九三七年三月）など、上海を舞台とした実話風の小説を数多く手がけた『上海毎日新聞』記者・白須賀六郎は、フランス租界という空間について次のような興味深い言及をしている。

何から書いていいのか判らないのが「上海の戦慄」である。あまりに書くことが多すぎるからだ。何がさて厄介千万な「フランス租界」の存在は、お陰様で我々にはよきパンの材料を与えてくれる。ギヤングもスパイも密輸も密造も、ここでは何んの不思議もない。^{四四}

フランス租界は国際犯罪都市として名高い上海の中でも、特に犯罪が集う地域であった。鮎子は真珠から逃れるために海外での新婚生活を恒雄に希望したが、二人の住処として選ばれたのはありとあらゆる犯罪が跋扈する上海の、よりにもよってフランス租界だったのだ。

婚前、鮎子は上海行きが決定した時に「せき立てるやうに、今からでも上海へ行き度い」気持ちになつてゐる。これは、上海が日本から離れた地である点と、様々な国籍の多種多様な人間が雑多に集結している点に安心感を抱いたからであらう。しかし、鮎子は上海の地で真珠に見つかつてしまふ。「あれはまさしく幻影ではなく、あのひまどだつたのだ。そしてあの人は、この私をあゝの二つの黒い瞳で上海で見逃さなかつたのだ。」という鮎子の恐怖は、上海という有象無象が蔓延る混沌とした都市の中で、狙い撃ちのように見つかつてしまったことへの戦慄と絶望なのだ。これこそ、鮎子が真珠に見つかる土地が上海でなくてはならなかつた所以であらう。

これまで確認してきたように、魔都上海は探偵小説との親和性が高く、しばしばその舞台装置として用いられた。「蝶」の主題は、鮎子が真珠や幻影へと抱く恐怖である。信子は「蝶」において、作中の恐怖を増長させる仕掛けとして魔都上海の性質を大いに活用しているのだ。

恐ろしい真珠から逃れるために上海へと渡航した鮎子は、「猟奇と犯罪の港街」へと降り立つ場面で、魔都の「不可思議な戦慄」を感じて「官能」に痺れている。これは、理性とは裏腹に無意識で危険な真珠と上海に惹かれる鮎子の心理の表れなのではないだろうか。また、魔性の女である真珠のキャラクター造形や、「猟奇と犯罪」が混沌と渦巻く上海を物語の舞台装置として活用する手法からは、同時代の探偵小説からの影響を見出すことができる。「蝶」に描かれた恐怖への志向は、「海潮音」(『小説倶楽部』一九四七年九月)を皮切りに戦後次々と発表される怪奇幻想小説群へと連続するのだ。

五、おわりに

かつての上海は租界都市という性質上、土地や人種、階層、文化など様々な境界を内包していた。さらに、一九

三七年の上海は歓楽の巷と戦場のほさまに位置する不安定なトポスであった。作品発表当時の日中間に漂う緊張感を背景に、魔都上海を物語の舞台装置として活用することで、「蝶」に描かれた鮎子の恐怖は増長し、より不気味かつ鮮烈なものとなっている。

戦時下において、信子は文学作品でも戦地報告文でも繰り返し上海を描いている。しかし、吉屋信子作品は朝日版全集に網羅されておらず、年譜にも誤情報が多い。加えて、戦後の書き換えなど様々な問題があるため、その全貌はまだ十分に把握されていない状況にある。本稿で示したのは、戦時下の吉屋信子作品に描かれた上海の、ほんの一端でしかない。

吉屋信子作品における上海描写の変遷を辿るとともに、上海を題材とした他作家による同時代作品との比較を行い、その関係性を詳らかにすることを今後の課題としたい。

【注】

一 「蝶」はテキストにあたるのが困難な作品であるため、簡単だが梗概を左に記載する。

妖しき黒衣の美女・三津木真珠未亡人に恋をした藤川鮎子は、ある日、真珠がアヘン中毒であることを知る。アヘンと鮎子に強い執着を示す真珠に恐怖し、鮎子は佐々恒雄という青年と結婚することで彼女への恋情を断ち切ろうとする。しかし、結婚後、鮎子は幾度となく「蝶」「黒衣夫人の姿」「蘭の花」の幻影を見るようになる。鮎子は真珠と距離を取るため、恒雄とともに日本を出て上海へと発つ。しばらくは上海で幸福な新婚生活をおくっていた鮎子だが、ある日、フランス租界の公園を歩いている時に写生旅行中の真珠と遭遇してしまう。

挙動不審な様子の妻に不信を募らせる恒雄に、鮎子は真珠への恋情を断ち切るために結婚へと踏み切ったこと、幻影が亡霊のように己に纏わりついていることを告白する。しかし、恒雄は鮎子の女性に恋をする気持ちにも、幻影が見えることにも全く理解を示さず、「まるで精神病者だよ」と責める。夫婦の仲は冷え切っていく一方であった。真珠との遭遇を契機に、鮎子は以前にも増して至る所で幻影に出会い、真珠の声を耳にするようになる。その後、一時東京に戻った鮎子の元に、真珠から彼女のアトリエの住所を記したカードが蘭の花とともに届く。鮎子は真珠の元へ行くこうとする自分を止めるよう恒雄に懇願するが、彼は妻を冷たく見捨てる。結局、鮎子は意を決して真珠の元へと向かう。

アトリエにやって来た鮎子を優しく出迎えた真珠は、彼女に南洋を旅して楽しく猛獣狩りをした話などする。そこへアヘンの商人が押しかけて来て真珠を無理やり手籠めにしようとするが、激しく争った末、真珠は商人を猟銃で撃ち殺し、鮎子はシヨックで気絶する。その後、妻の不在に氣付いた恒雄はアトリエに駆けつけるが、時既に遅し、二人はアヘンの過剰摂取で心中していた。アトリエの天井から一匹の蝶が舞い降りてきて、鮎子の腕、アヘンの注射痕にとまった。恒雄は「鮎子、僕は敗けた、たうとう妻を自分のものにしきれなかった敗北の良人だ！」と狂ったように叫ぶのであった。

二 「蝶」第十一話の末尾には、作者による次のようなメッセージが付記されている。

（日支事變の現地の北支と上海へペンの従軍を続けてみましたので、今月の原稿は少くて申しわけございません。来月からゆつくり落ち着いて、たくさん書きます。拾月四日。戦都上海より帰りて、我家の庭の芙蓉を見れど、いまだ砲聲を幻覚に感じつゝ、しるす）

（吉屋信子「蝶」『新女苑』実業之日本社、一九三七年十一月、一七六頁）

- 三 『吉屋信子全集』十二卷（朝日新聞社、一九七六年）の年譜には、「相寄る影」の初出について「日の出」一九三七年十月〜一九三九年六月」とあるが、これは誤情報である。なお、『日の出』一九三七年八月号は創刊五周年を記念した特大号で、「新掲載二大長篇」を担当する作家として吉屋信子と菊池寛の二名が抜擢されている。
- 四 新女苑主筆・内山基「創刊のことば」（『新女苑』一九三七年一月、二九八〜二九九頁）
- 五 『新女苑』広告（『朝日新聞』一九三六年十二月六日朝刊）
- 六 吉屋信子『私の雑記帳』実業之日本社、一九三七年、一二二頁
- 七 吉屋信子「良人の貞操」（『吉屋信子全集』五巻、朝日新聞社、一九七五年、二六一〜二六二頁）
- 八 同右、二六二頁
- 九 同右、一二三頁
- 一〇 清朝時代から「五方雑処」といはれた上海のこと、支那各省の人間がゐるのは勿論、世界四十三国人が全部居住してゐる。概算三百六十万の総人口中、居住外人七万を占めてゐるが、其の中最も多いのは我が日本人で、最近の調査に拠ると二六、二七〇人（全支那、香港在留人合計八七、八四〇）であり、英人これに次いで約九千人、続いて露、米、葡の順位である。
- （外務省編『国際時事解説』三笠書房、一九三七年、五一〜五二頁）
- 一一 徐青「メディアとしての女性——吉屋信子『戦禍の北支上海を行く』におけるシャンハイ・イメージ」（『愛知大学国際問題研究所紀要』一三三号、二〇〇九年三月、一七三頁（のちに加筆の上、徐青『近代日本におけるシャンハイ・イメージ』一九三一〜一九四五）国際書院、二〇二三年に所収）
- 一二 吉屋信子「蝶」（『新女苑』一九三七年五月、一四九頁）

一三 吉屋信子「蝶」(『新女苑』一九三七年六月、一五五～一五六頁)

一四 支那通として知られ、数多の中国紹介書を記した後藤朝太郎は「今や上海は日支連絡船の開けて以来東海道
延長の観があり神戸から一空二昼夜の処となり民国から云へば神戸は上海の延長地帯となつた訳である。」(後
藤朝太郎「序」『日本より支那へ』日本郵船營業部船客課、一九二四年、一～二頁)と語る。

一五 村松梢風「自序」(『魔都』小西書店、一九二四年)

一六 吉屋信子「蝶」(『新女苑』一九三七年八月、一六一～一六二頁)

一七 同右、一六四～一六五頁

一八 木村毅『上海通信』改造社、一九三七年、二一五頁

一九 支那の抗日運動は満州事変発生以後一層猛烈となり、上海の抗日会の排日、排日貨運動は殊に執拗なもので、
学生の反日運動も日を追うて激烈となり、上海における日支人の小衝突は頻発して日支人間の空気は非常に險
悪となつてゐた。

(朝日新聞社編『満洲・上海事変全記』朝日新聞社、一九三二年、一一一頁)

二〇 吉屋信子「蝶」(『新女苑』一九三七年八月、一六五～一六六頁)

二二 「上海は、前から抗日気分があるんですつてね、あの城内で、スケッチしてゐた時も、支那人が私達を、ちつと
見詰めてゐて、どうかされはしないかと思つて怖かつたわ。」／「うん、そんな気持がしたね、だが大丈夫だ。
いざとなれば、この陸戦隊が、我々の保護のために、かうして毎日訓練されてゐるんだ。」

(吉屋信子「相寄る影」『日の出』新潮社、一九三八年五月、四二〇～四二二頁)

「何故、支那は、日本にばかり反感をもつのでせう。このホテルだつて、さつき、下のトイレットへ行つたら、『支

那人の使用を許さず』つて貼紙がしてあるんですよ、仏蘭西租界の公園だつて支那人を入れないやうにしてあるんですつてね、そんな人種的な差別待遇を與へてゐるのにねえ。」／美佐緒は不思議さうな顔をした。／「さう、黄色人種が、侮辱されてゐる事は僕たちになだつて関係があるんだ、僕はかういふ国際的な都市へ来てみて、初めて民族的な精神に、目覺めて来た。」

(同右、四二二～四二二頁)

二三 吉屋信子「蝶」(『新女苑』一九三七年八月、一六七～一六八頁)

二四 統計資料協会編『文化事績録』A巻、統計資料協会、一九三四年、三八〇頁

二五 井上雅二『南洋』富山房、一九一五年、十八頁

二六 大久保達正ほか編『昭和社會經濟史料集成』二卷(海軍資料…二)、大東文化大學東洋研究所、一九八〇年、二一九頁

下関であんまり新しいバナ、をたくさん食べたので、東京のバナ、はほしくなくなつちまつて——それからパンカンは今も好きです。それに秋の甲州葡萄——それから昨年夏軽井沢で久しぶりでおいしい唐もろこしを食べて、一方ならず感激しました。あの原始的な食味の感じはずゐぶん好きです。／一時南洋の土人島へ行つて、自然の食糧のパンの木の実だの、バナ、を食べて、呑気に裸で水を飲んで暮して見たいと一寸憧れたりしましたが、——せめてもと庭に苺畑を作り、又昨秋庭に柿の木を植ゑました。花より団子、実の成る樹をもつと植ゑるつもりです。

(吉屋信子『私の雑記帳』、三七七～三七八頁)

二七 吉屋信子『最近私を見て来た蘭印』主婦之友社、一九四一年、一頁

二八 竹田志保は「吉屋信子の〈戦争〉——「女の教室」論」(『人文』十四号、二〇一六年三月(のちに加筆の上、竹田志保『吉屋信子研究』翰林書房、二〇一八年に所収))において「女の教室」をテキストに、戦時下にあつて多くの男性が徴兵される中、信子が時局を利用する形で物語の中から男性を排し、新しい〈女の世界〉を描き出していることを指摘しているが、南進政策を体現し、猟銃を手に「牡の豹」と「人間の牡」(「亞片密輸入者」)を撃ち殺す真珠の行動からは、〈男のいない世界〉(「女の世界」)を望む思想の萌芽が見られるのではないだろうか。

二九 藤田篤子「吉屋信子「蝶」——昭和十年代における女性の「怪奇小説／心理ホラー」の受容について——」(『愛知大学国文学』五二号、二〇一三年一月)

三〇 吉屋信子「蝶」(『新女苑』一九三七年八月、一六四頁)

三一 泥水の江上には各国の商船軍艦が浮び街には各国の軍人巡查彷徨其の間を人浚ひ、ピストル強盗、破落戸の横行、政治陰謀、アヘン密輸者、共産党の潜行、軍閥の喧嘩、排日暴動、鉄条網、義勇隊の出勤、陸戦隊の上陸、機関銃破囊といった様に少しも驚くことはない。事実上海の者は慣れて平気である。その影には競馬、競犬、西洋バクチ、広東バクチ、マーヂヤン、賭博、ダンス、野球、支那美人、イタリア美人、フランス美人、ベルギー美人、限らない淫盛、支那料理ロシア料理、オランダ料理、シヤンペン、ウイスキー、ウオツカー、老酒、ジカーウピー、カツト、スリーキヤツスル、阿片、何でも好きなものは金さへあれば遠慮なく食ひ放題、飲み放題無論内地より安い。

(田島圓次郎「上海の印象」『日本警察新聞』八一一号、日本警察新聞社、一九三〇年二月十日、十六頁)

三二 村松梢風「自序」(『魔都』)

三三 上海といふ処は、厳密な意味では警察権といふものが存在してゐないと云つていい。警察署は沢山ある。支那

政府の警察、各租界の警察、各領事館の警察——といふ具合にあり過ぎる程沢山ある。そして往来を歩くと、西洋人の巡查、印度人の巡查、安南人の巡查、日本人の巡查——といったやうに各国の巡查にぶつかる。まるで巡查の品評会だ。処がこの巡查が殆んど何の役にも立たない。否、巡查が間抜けと限つたわけではない。そもそもそれ程沢山の警察はあるけれど、其の間に統一も無ければ連絡も無いのだから、寧ろあり過ぎるのは邪魔になるだけだ。甲の租界で悪事を働いた奴が追はれて乙の租界へ逃げ込んだが最後雨だれ一すじ飛び越したばかりで、往来で帽子を取つて「御苦労さま」と挨拶をされても甲租界の警官は指を唾へてゐなくてはならない。其奴を捕縛しやうといふには、乙租界の警察へ行つて了解を得て来なければ手出しをすることが出来ないのだ。さうして漸う了解を得て戻つて来る時分には、悪漢だつて脚があるから何処へでもフツ飛んでしまつてゐる。

(同右、十七〜十八頁)

三四 同右、十七頁

三五 藤田知浩「解説」(『外地探偵小説集…上海篇』せらび書房、二〇〇六年、二八七頁)

三六 「Shanghaiする」Shanghaiと云ふ地名がその儘動詞化して、『水夫にする目的で酒に酔はせ又は麻酔剤を飲ませて覚めない中に船に連れて来る』といふ意味を有してゐることは、過去に於て英米人がこの国際都市からどう云ふ印象を先づ第一に受けたかと云ふことを示すもので、甚だ興味深いことのように思はれる。この動詞の使用されてゐる一例としては、Sean O'Caseyの戯曲『The Plough and the Stars』の第三幕の中に、長屋の屋根裏に住む英国最賃のあばずれ女Bessie Burgessが、同じ長屋に住む愛蘭人達に向つて吐く、*Yous are all nicely shanghai'd now.* (お前さん達あみんな今まんまとぺてんに掛かつてるんだよ)と云ふ悪口がある。／＼と云うので、昨今のShanghaiの情勢に立脚して考へる時、寧ろこの動詞には「日本人を侮辱する」「日本人を虐殺する」と

云ふ様な意味を持たせた方が、より適切になつて来たものではなからうか。／＼根本彦一

(根元彦一「Shanghaiする」『英語クラブ』七八巻一号、研究社、一九三七年十月、二四頁)

三七 田原良純「上海に於ける国際阿片会議(第二十九回総会演説)」『薬学雑誌』三二七号、日本薬学会、一九〇九年五月、四九二〜五〇四頁

三八 『新青年』には上海のアヘン窟リポートがしばしば掲載されたが、その内容は次のようなものである。

上海にはそれ／＼三万人の吸煙登録者がある。数年前まで上海には黒色同志——阿片を黒土と呼ぶに因りて名あり——の本営が方々にあつた。これが前にも話した「燕の巢」だ。(支那料理の燕巢とは違ふ)そこへは日ねも夜もすがら、一軒に四五十人の同志が集つて永遠性と悠久性を楽しんでゐた。しかし一九三七年一月一日からは、断然、絶対にかゝるタグヒの存在が認められなくなつた。／＼だが、冒険は人間の本能である。／＼而も阿片は人智をヨリ高い段階へと啓発してくれる「智慧の薬」でもあるのだ。危険を犯して遊び楽しむところにロマンチズムがある。上海の黒色同志^{あへんずひ}の中で、公然と登録をしないで、お上と智慧の戦争をしてゐるものがざつと倍と見積つて三万人以上ある。かくて合法非合法と合せて、その人数ザツと六七万は最も確かなところである。

(楊樹浦「阿片窟探検記」『新青年』一九三七年五月特大号、三一八頁)

三九 石川県薬業組合連合会『薬事法規集』石川県薬業組合連合会、一九三六年、六八頁

四〇 吉屋信子「蝶」(『新女苑』一九三七年十二月、一五九頁)

四一 吉屋信子「蝶」(『新女苑』一九三七年十二月、一六〇頁)

四二 吉屋信子「蝶」(『新女苑』一九三七年五月、一四六頁)

四三 現在の青幫が藍衣社、C・C団その他の近代的な組織を持つ秘密結社の出現によつて漸時凋落の過程をたどり

つゝあることは事実であり、蒋介石政権擁護を標榜し藍衣社に対して追従的態度をとつてゐることも否みがた
いことではあるが、なほ上海仏蘭西租界を本拠とするその勢力には牢乎として抜くべからざるものがある。上
海に於ける幫員は現在も十万を下らないと見られてゐるが、その勢力は黄浦江、蘇州河等の船舶に働く数万の
労働者は勿論、数多くの阿片窟モルヒネ、コカイン密売所等は悉く青幫の保護下に経営され、一流商店等もそ
の保證を要する有様で、従つて年々青幫の幹部に収められる保證金も数百万元を下らないことである。ま
た仏蘭西租界の行政警察権を一手に握る工部局の如きも、杜月笙はじめ青幫幹部を顧問に招聘し、支那人密偵
には凡て青幫員を以て充てることによつて辛うじてその治安を維持してゐる有様である。

四四
（梶原勝三郎「蒋政権下に踊る秘密結社」『東大陸』十四卷十一号、東大陸社、一九三六年十一月）
白須賀六郎「はしがき」（『魔都上海の戦慄…付・殺人請負業者』森田書房、一九三六年）